

2025 年 3 月 (38 号)

JACET 北海道支部 Newsletter

〈北海道支部事務局〉

〒062-0911 札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号

北海学園大学 岩田 哲 研究室内

TEL: 011-841-1161 (代表)

Email: akiraiwata [@を入れる] hgu.jp

URL: <http://www.jacet-hokkaido.org/>

〔巻頭言〕

2024 年度を振り返って

JACET 北海道支部長
松本 広幸

この冬インフルエンザやコロナウイルスに感染された方もいらっしゃると思われませんが、会員の皆様におかれましては大過なくお過ごしのことと拝察いたします。2024 年度を振り返ると、まずは3年連続対面で支部大会、支部総会を開催できたことをうれしく思います。昨年度も述べましたが、オンライン開催よりも対面開催の方がいろいろな面でメリットが大きいと感じています。やはりお会いしてお話しできるという当たり前のことが当たり前に見える世の中が戻ってきたのは大きいと思います。会場校をお引き受けいただいた北星学園大学のご厚意にあらためまして感謝いたします。支部大会の基調講演では、北海学園大学経済学部教授の柁木貴之先生に「国語教育と英語教育をつなぐ：連携の歴史、方法、実践」をテーマにお話いただきました。明治期から現在に至るまでの連携の歴史を概観した後、連携の具体的方法や実践例の考察について深く掘り下げたお話を聞くことができました。関連するシンポジウムは「科目横断型英語授業実践」を共通テーマに高校と大学の授業実践例を紹介いただいた後、フロアーの参加者と意見交換いただきました。また研究発表として大学英語教員の授業不安要因、TOEIC IP テストスコアの分析についてお話いただきました。第一回研究会では、リスニング授業でのメタ認知指導の効果、習熟度に合わせたリスニング教材作成、テスト形式による語彙習得効果の違いについて発表いただきました。第二回研究会は、例年どおり日本コミュニケーション学会北海道支部と北海道英語教育学会との合同で行われ、弘前大学の佐藤剛先生をお迎えして「教科書分析が導く語彙指導の未来：小中高の教科書データが示す現状と課題」をテーマにお話いただきました。研究発表として、問題な日本語を学生と共有する活動報告、英語リーディング選択問題作成の留意点、大学レベルの翻訳授業のあり方、ELF コミュニケーションにおける交感的言語使用の調査についてご報告いただきました。また、英語教育への生成 AI 導入による教育効果についてワークショップを開催いたしました。

2025 年度の支部大会は 7 月 5 日 (土) に北海学園大学にて対面開催され、基調講演として成蹊大学の藤田玲子先生に「インバウンド観光と英語コミュニケーション」をテーマにお話を伺います。関連するシンポジウムは「インバウンドと英語教育」をテーマに実施します。また第 64 回国際大

会は東日本ブロック担当で 8 月 27 日（水）から 29 日（金）まで「新時代における英語教師力の強化」“Enhancing English Teacher Capabilities for a New Era”をテーマに東京で開催されます。皆様、奮ってご参加ください。

最後になりますが、近年、支部大会や研究会へ参加される会員数が減少傾向にあります。会員の皆様のご理解、ご協力なくして学会活動は成り立ちませんので、今後ともよろしく願いいたします。

〔2024 年度支部総会〕

日時：2024 年 7 月 6 日（土）12:20 ～ 12:50

場所：北星学園大学 C 館 4 階 C401 教室

〈報告〉

1. 支部長報告
2. 幹事報告
 - 2-1. 2023 年度 事業報告
 - 2-2. 2024 年度 事業計画
 - 2-3. 2024 年度 人事
3. 各種委員会報告
4. その他

〈議題〉

1. 2025 年度 事業計画案（承認）
2. 2025 年度 人事案（承認）
3. RBET 投稿規程及び査読規程の一部見直しについて
4. その他

〔2024 年度支部大会〕

日時：2024 年 7 月 6 日（土）13:00 ～ 16:40

場所：北星学園大学 C 館 4 階 C401 教室

【基調講演】

「国語教育と英語教育をつなぐ：『連携』の歴史、方法、実践」

柁木 貴之（北海学園大学）

新学習指導要領では、小中高すべての段階で「国語教育と英語教育の連携」が推奨されている。しかし、「連携」は本当に新しい発想なのだろうか。また、「連携」の実践はどのように行えばよいのだろうか。このような問いについて考えるため、本講演では、拙著『国語教育と英語教育をつなぐ』（東京大学出版会、2023 年）の内容に基づき、「連携」の歴史、方法、実践について論じる。

講演の前半では「連携」の歴史を概観する。その中では、明治期から現在に至るまで、連綿と「連携」の議論がなされてきたことが見えてくる。後半では「連携」の方法と実践について考察を行い、その教育効果を検証する。さらに著書刊行後の研究として、新課程の高等学校国語教科書・英語教科書、計 163 冊に対する調査に着手したので合わせて紹介したい。「連携」というテーマを通し、今後の言語教育のあり方を考える機会となれば幸いである。

【シンポジウム】

「科目横断型英語授業実践」

コーディネーター：松本 広幸（北海学園大学）

助言者：柁木 貴之（北海学園大学）

シンポジスト：對馬 光揮（札幌市立藻岩高等学校）

三上 全（札幌市立開成中等教育学校）

沢谷 佑輔（北星学園大学）

本シンポジウムでは、国語教育を含めた科目横断型の英語授業について、フロアーの参加者も交えて意見交換したいと思います。中等教育機関と高等教育機関で教鞭をとられている 3 名のシンポジストの実践例を紹介して頂いたのち、フロアーの参加者からも意見を頂戴したいと思います。尚、基調講演講師の柁木先生にも助言者として登壇していただきます。議論を通じてよりよい英語教育の実践について考えを深められればと考えます。

〔2024 年度第 1 回支部研究会〕

日時：2024 年 11 月 9 日（土）13:00 ～ 14:50

場所：札幌大学 6 号館 6102 教室

【研究発表】

1. 「リスニング授業におけるメタ認知指導の効果：自己調整能力のある学習者を目指して」

中島 優子（北海道武蔵女子短期大学）

第二言語習得の分野において自己調整能力が重要視されて久しい。この能力が高まれば学習者は自らの学習プロセスを観察し、目的を達成するために様々な方法を模索できる。一方、リスニング指導では教科書中心、会話中心の指導が多くを占め、学習者中心の指導を実践する授業は少ない傾向にある。メタ認知指導は学習者中心の指導方法で聴き方そのものに焦点を当てる。この指導の下、学習者はメタ認知知識を身に付けリスニングプロセスの理解を深めることができる。最終的に学習者は自らの学習を自己調整する力を身に付ける。本研究では、メタ認知指導を受けた学習者の自己調整能力がどのように変化したのかを分析する。2022-2023 年に入学した短期大学の 1 年生 41 名が 1 年間にわたって記入した授業中や期末の振り返りコメントをメタ認知知識やリスニングプロセスに対比させて分析する。最後に授業への応用の可能性について考察する。

2. “Utilizing Computer-Synthesized Speech in the Creation of Custom Listening Materials”

Lucas Denton (Sapporo International University)

Language learners seeking to improve their conversational skills will benefit from exposure to listening materials that are challenging but still accessible to them. While textbooks often include recordings of fluent speakers engaging in conversations that incorporate the content covered, these materials may exceed the listening abilities of students with lower proficiency. Textbook listening materials may be excessively long or feature accents which make them less accessible to beginner students. By integrating recordings of one's own voice with computer-synthesized speech, it is possible to create more accessible listening materials of appropriate length recordings are easier to comprehend due to students' prior exposure to the teacher's voice, more natural than a single speaker talking alone, and allow for a focused emphasis on the language patterns and vocabulary students are practicing in class, while avoiding language that exceeds the students' current proficiency level. This presentation outlines and reports on a method for creating such materials.

3. “Effect of Random Selection Tests on Vocabulary Learning in Japanese Learners”

Kiwamu Kasahara (Hokkaido University of Education)

Recent L2 vocabulary studies have examined the benefits of spaced retrieval practice, which combines retrieval practice (the testing effect) and spaced learning (Kanayama et al., 2022). This method improves long-term retention by requiring learners to retrieve learned items over multiple sessions. Nakata et al. (2021) confirmed its effectiveness using cumulative tests (CTs) that repeatedly test previously studied items. However, CTs may give less attention to items introduced later in the study. To address this, this study introduced random selection tests (RSTs), which randomly test from all target words. Experiment 1 with university students showed RSTs to be superior to CTs. Experiment 2, conducted in a junior high school, compared RSTs to traditional tests, where target items are tested only once. The results indicated that RSTs were not more effective than traditional tests for junior high students, suggesting proficiency level and the number of target items as potential factors.

〔2024 年度第 2 回支部研究会〕

日時：2025 年 3 月 8 日（土）13:00 ～ 16:40

場所：北海学園大学 豊平キャンパス 8 号館 B-31 教室

【研究発表】

1. 「『問題な日本語』を学生と共有化する小活動の報告」

佐々木 智之（北海道科学大学）

学生との日々のコミュニケーションの中で、「問題のある日本語」が気になることがある。教

員として問題点を指摘するのは簡単だが、あえて問題な日本語について、学生と共有化することを試みた。問題のあることばの洗い出し、「何が問題か」の話し合いをしていくうちに、問題点を「過度の略語」「誤用」「あいまいな表現」とラベル化することによって、コミュニケーション上どんな問題が起こるのかを考える機会になった。

2. 「第2外国語リーディング理解問題の改善について：良い多肢選択の作り方」

竹内 康二（札幌国際大学）

大学で一般的に行われているリーディング授業の評価において、教授内容を的確に反映し、公正で偏りがなく、評価される学生にも納得のいく質問を作成することは、教員の最も重要な責務の一つである。また、授業の評価活動は、教員の語学習得に関する知見を反映するとともに、その語学習得の最後の重要なステージでもある。この実践発表においては、第2外国語リーディング理解において評価すべきことは何か、適切な評価を実現するために、多肢選択問題を利用する場合に留意することは何か提言したい。

3. “Developing a college-Level translation course through the lens of discourse communities”

Marshall Klassen (Hokkaido University)

This presentation will explore teaching approaches for college-level translation courses, focusing on the critical importance of high-context communication in English and Japanese media. Translation and localization encompass a multifaceted understanding of language and culture, including the analysis of cultural values, norms, and linguistic features within diverse discourse communities. As Japanese higher education increasingly emphasizes global citizenship and intercultural communication, the ability to interpret and convey cultural meaning and nuance within specific contexts becomes paramount in translation studies. This presentation will outline strategies for addressing high-context communication in translation courses and explore valuable resources to enhance student learning in this area.

4. 「ELF コミュニケーションにおける交感的言語使用の調査」

佐藤 亜美（名古屋商科大学）

EFL (English as a Lingua Franca) によるコミュニケーションの研究では、母語が異なる英語使用者が、どのように意思疎通を行いまた相互理解を達成しているかという観点から、相互行為における言語使用の特徴が調査されている。本研究では、国内の ELF コーパスである ELFJ Corpus に収録された 18 組の会話（日本語を母語する英語使用者と、日本語以外を母語とする英語使用者の Zoom による二者間会話）を分析し、同コーパスの先行研究（Kuroshima et al., 2022 など）を踏まえながら、特に会話参与者間のラポールを高める交感的言語使用 (phatic communion) に着目して、EFL による相互行為の特徴を検討した。発表では、交感的言語使用の事例を示しながら、英語の言語的資源が限られている初級英語使用者が、異文化接触の場面でどのように対人関係を構築・維持しながらコミュニケーションを達成しているかを考察し、今後の課題や英語教育への示唆を提示する。

【ワークショップ】

「生成 AI×英語教育 広がる学びの可能性」

森田 明香（士幌町立士幌町中央中学校）※Zoom 参加

生成 AI の活用を授業外でコントロールすることは不可能だ。授業の中で学びのパートナーの一つとして活用し、「どこで生成 AI を活用することが有効か」を考えさせる場面設定が大切だ。一人ではできないが、助けがあればできる生徒たちにとって、生成 AI による支援（足場かけ→協働学習→自己添削）は大変有効だ。どこから書いていいかわからない生徒にとっては、お手本となる英文を提示してもらうことで英語らしい「型」を身につけることができる。ある程度「型」が身に付いたら、自分の言葉で表現する体験を協働的に行う。言い換え表現を提示してもらいながら、繰り返し行うことで「自分の本当に言いたいことが言える術」を学び、英語を発信することへの自信につながる。次に、「ループリック評価」を使った自動添削機能を使い、書き足りないところを補うヒントをもらいながら何度も発信を続けることで表現がブラッシュアップされ、本当に使える英語を身につけることができる。自分の言いたいことを自分の言葉で伝え、分かりあえる体験、これこそまさに心揺さぶられる本当の学びである。生成 AI と創る新しい学びのカタチを参加された方と一緒に考えていきたい。

【講演】

「教科書分析が導く語彙指導の未来：小中高の教科書データが示す現状と課題」

佐藤 剛（弘前大学）

現行の学習指導要領では、小学校で 600～700 語、中学校で 1,600～1,800 語、高校で 1,800～2,500 語の語彙指導が求められ、合計で 4,000～5,000 語が指導されます。しかし、具体的な指導語彙の選定は出版社や現場の裁量に委ねられており、多様かつオーセンティックで柔軟な語彙指導が可能である一方で、学習語彙にばらつきが生じる懸念があります。そのため、これまで小学校、中学校、高校の検定教科書をデータ化し、語彙の実態調査を行い、共通して学ぶべき語彙の選定を継続して行ってきました。

本講演では、これまで蓄積してきた小中高の検定教科書における語彙データを集約し、それぞれの校種の検定教科書における語彙数や共通語、特徴語の分析結果を紹介します。また、小中高の出現語彙の比較や一貫性に関するデータを基に、日本の英語教育における語彙指導の現状と課題を考察し、実現可能な方向性を皆様と共に探りたいと考えています。

〔編集後記：2024 年度を終えて〕

年度末を迎え、受講生による後期の授業評価が返ってきました。今年度は特に、ディスカッションやグループワークを通じて「さまざまな人と意見を交わし、多様な考えに触れたこと」が良かったという声が目立ちました。高校や大学 1 年次にコロナ禍でオンライン授業を経験した学生たちにとって、対面での交流がより特別な意味を持ったのかもしれませんが。「自分たちでさらに活発な授業をつくっていきたい」という前向きな声も寄せられ、そうした思いに共鳴しながら学生たちと歩める喜びを改めて感じています。(M)